坂口安吾「勉強記」論

陳　暁芝

I　はじめに

「勉強記」は坂口安吾が「文体」（第二巻第五号、一九三九・五）に発表した短編小説であり、後に加筆され短編集『炉辺夜話集』[1]（スタイル社、一九四一・四）に収録された。戦後の短編集『白痴』（中央公論社、一九四七・五）及び『風博士』（山河書院、一九四八・一）、全集『定本坂口安吾全集』（第一巻、冬樹社一九六八・一）、『坂口安吾全集』（第三巻、筑摩書房、一九九〇・二）にも収められている。

震災後の年で涅槃大学印度哲学科に入学した栗栖按吉は「常に考えている」顔つきをしているため、他の坊主の生徒から敬遠されている。仏教原典に使われる梵語と巴利語を順次に勉強したが、途方に暮れた按吉が言語勉強を諦めようかに思い至った。その後放尿癖・放屁癖のある言語学者・鞍馬六蔵に出会い、チベット語教授を受けているうちに按吉が厭世的になり、六蔵の帰郷を切っ掛けに言語勉強のことから身を引くことができた。その後按吉は悟りを開けるため多数の高僧を訪問したが、どちらの教義にも会得し難く、高僧の「肉体の温顔」に妨げられて、悟りを開けなかった。後に按吉は芸者遊びの体験を強いられ、坊主にある性欲の汚さに失望して、「迷う心があるうちに迷い抜くより仕方がない」という痛感の念を抱くようになる。最後に回教徒の隊伍に入ろうかと迷っていたが、回教者が集まる講習会に向かう途中、女学生を見て心動かされ、出席を取りやめる。回教から自ら退く按吉は生まれて初めて本当のことをしたと感動して「悟り」を諦めたという物語である。

管見の限り、同時代において「勉強記」を論じたものはなく、『炉辺夜話集』収録に際し、総論的に言及される程度である。[2]「ユーモア」、「奇想天外の味」等のキーワードが挙げられながら、いずれも高く評価されていない。先行研究では主に「勉強記」を「自伝的小説」[3]、「ファルス」的な作品と位置付けている。例えば、奥野健男[4]は安吾の実経験に注目して、「「勉強記」は作者が初めて書いた自伝的小説の一断片である。東洋大学印度哲学科の学生であった時の求道生活と、パーリ語、チベット語、梵語などの途方もない語学の勉強の苦しさ、一途さをファルスの形で戯画化したものである。ここでは敢えてファルスにしようとする肩の張りもなくなり、素直にそしてユーモラスに青春の一時期をやや大げさに語っている好ましい作品である」と指摘している。土屋慶子[5]は「「勉強記」には、縦横にファルスが手法として用いられている。栗栖青年の「極度に漠然たる構え」や「魂」をかたる作者の口調の中にはむろんのこと、作品の構成や文体すべてがファルスである」と述べ、「勉強記」を「ファルスの形で戯画したもの」としている。矢島道弘[6]と佐藤貴之[7]は「勉強記」と、同年に連続して発表された「茶番に寄せて」との関連性を指摘して、「勉強記」

を「完全なファルスな形式をとっている」「戯作」、「道化」の形象化、〈笑い〉を狙った物語としている。そのほか、土屋慶子[8]では、栗栖青年の「欲望」に焦点をあて、「堕落論」などにおける思想の萌芽が看取している。この論点を継承した石月麻由子[9]では、「勉強記」を〈反教養小説〉としてとらえ、続いて、『炉辺夜話集』の「後記」に結びあわせ、「文学のふるさと」の構想が萌芽していたことを述べている。

先行研究より、「勉強記」は安吾が文学的出発期に標榜した「ファルス」と、以後、断続的に書かれることになる「自伝的小説」との交錯点に屹立しつつ、「文学のふるさと」、戦後の「堕落論」などにおける思想の萌芽をも看取しうるという点で、安吾文学の多様な要素を包含した位置にあることが考察されてきた。作品自体を単独で考察した極めて少ない作品論のなか、佐藤貴之は「勉強記」（「文体」に掲載された部分だけがとらえられている）に描かれた「矛盾」に着目し、「茶番に寄せて」と共通する「戯作」の意識を見出し、「道化」の形象化を試みる安吾の意図を指摘していることが示唆的である。「勉強記」から「ファルス」的な共通の要素を整理して「勉強記」を「ファルス」的な作品と位置付けているが、「勉強記」にある〈笑い〉の独自性について十分に論じられていないように思える。そして作品の中で提示されている時代状況、および「主義者」という人物特徴の持つ意味、「勉強」の過程にある一連の挫折から「勉強」（・「悟り」）をあきらめていくことの意味についてはほとんど論究されていない。

本稿はまず、作中人物栗栖按吉による〈笑い〉と語り手による〈笑い〉を分析して、作品における〈笑い〉の要素を引き出し、安吾の〈笑い〉観念――「FARCEに就て」（「青い馬」第五号、一九三一・三）と比較したうえ、「茶番に寄せて」（「文体」第二巻第二号、一九三九・四）に照らし合わせて、「勉強記」にある〈笑い〉の独自性を考察する。続いて、未だ充分に追究されているとは言い難い時代状況を手掛かりに、「主義者」という人物特徴の持つ意味を分析して、主に按吉が「勉強」（「悟り」）への執着と放棄の過程を分析する。最後に、栗栖按吉の人物形象を緻密に考察して、作品の主題と作者の意図を明確にする。

Ⅱ　作品における〈笑い〉について

「勉強記」における〈笑い〉は、主に（語り手及び作中人物）人物の言説挙止にある〈愚かさ〉に拠るものである。例えば、「無意味な先生は誰かと云えば、先生よりも物識の生徒の先生と、涅槃大学校の印度哲学科の先生であった。ここの生徒は耳と耳の間が風を通す洞穴になっていて、風と一緒に先生の言葉も通過させてしまう。然し先生はそんなことを気にかけない。先生は喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらっていないからであった」の箇所が典型的に示しているように、「先生は喋るために月給をもらっているが、教えるために月給をもらっていない」の印度哲学科の先生と同様に、按吉と語り手も奇矯な人物として造型されている。表現上では、感嘆詞や比喩法や口調・語勢などを通して、人物の挙止にある〈愚かさ〉を拡幅させることで、〈笑い〉を成り立たせる。

先に、表現上における〈笑い〉を幾つかの例で見てみよう。「人体に於て最も発汗する場所はどこか？　頭！　毛髪はなんのために存在するか？　汗をふせぐためである？　ああ。医学博士でも生理学者でも、ここまで知っている筈はない。なぜなら彼等には毛髪があるから」にある句読点「？」「！」と感嘆詞の「ああ」との使い合わせを通して、断定的な語気をさらに増幅させ、自問自答を繰り返す按吉に

おける論理の混乱を見せながら、頭が「人体に於て最も発汗する場所」ということを信じ込んでいる按吉の〈愚かさ〉をクローズアップして、〈笑い〉を成立させる。

そして「必要以上にポマードをたっぷりつけて、ああ畜生めなんだって帽子などいう意味のはっきりしないものがあるのだろうと考えるのだ」にある感嘆詞の「ああ」を使用することで誇張的に僧籍を持つ坊主の学生の〈愚かさ〉――坊主の子供が大学に入ると一番先に毛を延すこと、を現す。

「キ、君々々。ボ、梵語を一年も勉強してから仏蘭西語としゃれてみろ。あんなもの、朝めし前の茶漬けだぜ。え、おい、君」にある「キ、君々々。ボ、」のような流暢しない淀みのある言い方を通して、按吉の身の程をわきまえられない〈愚かさ〉――按吉が梵語辞典すら上手く使用できない自身の実力のなさに目を隠し、人を教示しようとすること、を増幅させる。「単語なんか覚えるよりも、もっと実質的な勉強をした気持になる。肉体がそもそも辞書に化したかのような、壮大無類な気持になってしまうのである」にある比喩手法――「辞書に化したか」の使用を通して、按吉の馬鹿馬鹿しさ――実質的に何も勉強できていないのに「壮大無類な気持」になること、を強調する。続いて、主に人物造型自体による〈笑い〉を見てみよう。

1　栗栖按吉による〈笑い〉

栗栖按吉は「涅槃大学校という誰でも無試験で入学できる学校の印度哲学科」の一生徒であり、「当節の悧巧な人」と違って、「常に考えている」顔付、「主義者づら」をしている「危険」な人物と思われる「場違い者」として登場する。按吉の人物造型による〈笑い〉は、主に読者の〈期待はずれ〉にある按吉の挙止、と按吉自身における物事に対する〈意味の取り違え〉（勝手な思い込み）の2種が挙げられる。

まず、読者の〈期待はずれ〉による〈笑い〉として、僧籍のある坊主の同級生が大学に入ると髪の毛を伸ばすのに対して、按吉は頭髪を剃る例が挙げられる。頭髪を剃るときっと頭が良くなることは当時神経衰弱の按吉が真剣に考えた選択であることとして描かれている。そして、按吉の〈意味の取り違え〉（勝手な思い込み）に拠る〈笑い〉は以下の例が挙げられる。

> 按吉はどこでどうして手に入れたかイギリス製の六十五円もする梵語辞典を持っていた。日本製の梵語辞典というものはないのである。これを十分も膝の上でめくっていると、膝関節がめきめきし、肩が凝って息がつまってくるのであった。これを五時間ものせている。目がくらむ。スポーツだ。探す単語はひとつも現れてくれないけれども、全身快く疲労して、大変勉強したという気持になってしまうのである。

引用文の「探す単語はひとつも現れてくれないけれども、全身快く疲労して、大変勉強したという気持になってしまうのである」の箇所が示したように、按吉が実質的に何もしていなかったのに「大変勉強したという気持」を抱くようになる。いわば按吉における物事の考え方自体が自分都合の割合が大きく、自分の思った通りに物事を取り計らう、という勝手な思い込みを抱くようになる可笑しな人物として設定されている。

2　語り手による〈笑い〉

作品において、「諸君も御承知であらうけれども、ゴリラとか獅子

とか蟇とか、みんな考え深い顔付をしている」、「が、幸いにして、読者ももとより御承知の通り、蟇やゴリラはめったに人に話しかけない」の箇所が示したように、語り手がしばしば読者に呼びかけている。

ある時、語り手が按吉との距離を意識して、按吉との違いを主張するように見える。例をあげれば、人体の最も発汗する場所は頭であるという按吉の思考について、「まったくもって栗栖按吉の思考にうっかりこだわっていると、私まで愚かな奴だと思われてしまう。私は急いで話をすすめなければならない」箇所が示したように、語り手の「私」は可笑しな按吉と異なる位置にいることを言い立てたりしている。

しかしながら、按吉の常識離れの行為や認識に距離を置くように表明しながら、実際は語り手も、按吉と同様な愚かな面も見られる。例えば、「チベット語や梵語というものは、辞書が引けず、読むことができなくとも、ちゃんとそれで読めている結果になっているのかも知れぬ」のように語り手が語っているからである。

ここで筆者は日本帝国の国威のために一言弁じなければならないが、帝国大学の先生が辞書がおひけにならなくともそれは日本帝国の不名誉にはならないという事である。なぜならば、ラテン大学校の秀才も、やっぱり辞書がおひけにならないからであった。

ここでは、日本帝国や帝国大学へのアイロニーとして捉える箇所であるが、語り手が按吉と比肩できそうな奇怪なロジックを抱いていることがはっきりである。

Ⅲ 「茶番に寄せて」

「勉強記」が刊行される前月に、坂口安吾が「茶番に寄せて」（「文体」第二巻第二号、スタイル社、一九三九・四）を発表した。「FARCEに就て」（「青い馬」第五号、一九三二・三）に続いて、新たに〈笑い〉について以下のように述べている。

笑いは不合理を母胎にする。笑いの豪華さも、その不合理とか無意味のうちにあるのであろう。ところが何事も合理化せずにいられぬ人々が存在して、笑いも亦合理的でなければならぬと考える。無意味なものにゲラゲラ笑って愉しむことができないのである。そうして、喜劇には諷刺がなければならないという考えをもつ。／然し、諷刺は、笑いの豪華さに比べれば、極めて貧困なものである。諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はいつも危く、その正体は貧困だ。諷刺は、諷刺される物と対等以上であり得ないが、それが揶揄という正当ならぬ方法を用い、すでに自ら不当に高く構えこんでいる点で、物言わぬ諷刺の対象がいつも勝を占めている。／諷刺にも優越のない場合がある。諷刺者自身が同時に諷刺される者の側へ参加している場合がそうで、また、諷刺が虚無へ渡る橋にすぎない場合がそうだ。これらの場合は、諷刺の正体がすでに不合理に属しているから、もはや諷刺と言えないだろう。諷刺は本来笑いの合理性を掟とし、そこを踏み外してはならないのである。

以上の引用でわかるように、安吾が、「諷刺」を「貧困なもの」として、強く拒否感を表明している。一九三二年の「ファルス」の概念

を提起した時点で、安吾の〈笑い〉論では、「ファルス」を称揚しながら、「諷刺」を含む他の「喜劇」を否定する口吻は見られないことに対して、「茶番に寄せて」に至って、「諷刺」を拒絶する態度になるのは、一九三五年前後の文壇の話題の一つ――「諷刺文学」を強く意識した事による、という佐藤貴之[10]の指摘が示唆的である。「諷刺」の社会的賞罰機能、いわば、当時の政治的抑圧、言論弾圧への対抗の手段としての「諷刺」の目的論的な姿勢に安吾が拒否を示した。実際に、安吾が当時の座談会[11]で諷刺精神の低さを批判して、諷刺には「自己批判」が含まれていないと指摘した。

「諷刺論」（坂口の発言）

要するに風刺の精神は低いものだと思ふ。どんな安つぽい精神の所有者にも風刺はできるんだ。／文学の風刺では自分は別にして他のものを風刺するなんて事はあり得ないよ。／ボルテールは自分をもやつ附けてるよ。なぜなら、奴はニヒリストだから……ニヒリズムとも諷刺とも見ていゝと思ふ。とにかく自己批判というものが失われて居らんから……

「自己批判の問題」

平野　しかし、自己批判とはそもそも何ですかね。僕は自己批判もそれ自体としては意味ないと思ふね。

坂口　そうじゃないんだ。（中略）自己批判もやはり他人の批判を通してもでる……

平野　とにかく自己批判は非建設的なものだと思ふな。

坂口　それはやはり建設的だよ。建設でなければ意味ないんだ。

坂口　人のことを書いてゐても、自分を批判しているか如何か……。

安吾が「茶番に寄せて」で述べた「自ら不当に高く構えこんでいる点」で、「諷刺」は「極めて貧困なもの」で、「諷刺する人の優越がある限り、諷刺の足場はいつも危く、その正体は貧困」で、要するに「自己批判というものが失われて」しまったことと等しいと述べている。ここでは「風刺」への批判問題が大いに「自己批判」への問題に関連していると安吾が言い切っている。

「勉強記」では、作中人物と語り手が、いずれも愚か者として設定されていることが、「諷刺」にある、上位にいる笑う対象、と下位にいる笑われる対象、という〈笑い〉の世界のありがちな〈上下関係〉を崩壊させる、という安吾の〈笑い〉観を反映している。「勉強記」における〈笑い〉がとくに作品の前半部で色濃く表出されている。「勉強記」の内容は、一九三九年五月に「文体」第二巻第五号に掲載された部分と、一九四一年四月に『炉辺夜話集』収録時に加筆された部分[12]から成る。「勉強記」初出の本文末尾には「（続）」とあり、次の作者の言葉が付されている。

附記。先月号に戯作を書いて見せるなどと大言壮語してゐましたのは「殺人とは何與」といふ題名のもので、これは複雑な趣向を要し、短日月では完成しさうもありません。とりあへず、「勉強記で」（ママ）間の合わせる次第です。来月完結の予定。「段人（ママ）とは何與」は完結次第本紙へ発表致します。

安吾の言葉によると、作家本人が「勉強記」（前半部）を間に合わ

せの「戯作」として捉えていることがわかる。拙稿の「村のひと騒ぎ」論（陳暁之『坂口安吾初期文学研究』、立命館大学大学院博士論文、二〇二二）で確認してきたように、従来安吾の〈笑い〉ものの特徴の一つには、類型的概念的な人物を取り扱うことがある。言い換えれば、人物の心理変化に触れず、客観的に人物の行動をそのまま描出するだけということである。例えば、作中人物の関係をいうならば、互いに無関係であるように、各自好き通りに行動することが挙げられる。「勉強記」の場合では、按吉が作者の他の〈笑い〉ものに登場する人物（例えば、「村のひと騒ぎ」の医者や青年訓導や小学校の校長ら）と同様に、読者を笑わせる愚かな言説挙止をもつ点が挙げられるが、心境変化について大幅に描出されている点が大いに異なっていることがわかる。作中人物――按吉、鞍馬先生、ないし語り手を「矛盾」そのものの体現の道具たてとして、「「勉強」の無意味さを勉強した」、「勉強記」を単なる「洒落落ちの小説」[13]と片付けられないように思える。第一、最初において按吉が何を勉強しようとして、最後になぜ「悟り」（勉強）を放棄したかを明確しなければならない。次節では、「主義者づら」の設定を考察して、作中における読者への喚起という語りの特徴の意味を明確にする。

Ⅳ 「主義者づら」について

按吉は「涅槃大学校という誰でも無試験で入学できる学校の印度哲学科」の一生徒であり、「当節の悧巧な人」と違って、「「常に考えている」顔付」、「主義者づら」をしている「危険」な人物として登場する。語り手が長らくこのように述べ続ける。

だから当今「常に考えている」顔付をあくまで見たいという人は、精神病院へ行くよりほかに仕方がない。あすこの鉄格子のあちら側には即ち必要以上に考え深い人達が、その考え深いという性質や容貌を認められて、幸福な保護を受けているわけなのである。／たまたま時世が時世であったから、人々は栗栖按吉の考え深い顔付を見ると、さては、という必要以上に大きな空気をごくりと呑んで、つまりこういう顔付が刑務所の鉄格子のあちら側にある顔だと思いこんでしまうのだった。即ち、これが「主義者づら」だと思ったのである。／（中略）あの顔付は危険だ。動物園の鉄格子の外側へ野放しにして、所もあろうに涅槃大学の印度哲学科でもうひと苦労考える苦労を重ねるという、思い余った挙句には突然爆裂弾を投げつけたりピストルを乱射したり、それはもうみんなこの顔付のてあいなのである。

引用文から「「常に考えている」顔付」（「考え深い顔付」）＝「主義者づら」、という情報が確認できる。ここでの「主義者づら」はいうまでもなく、同時代に社会主義、共産主義、左翼運動などに関わる〈主義者〉のことである。こうした〈主義者〉の話を素材として取り入れた一九三八年から一九四六年の坂口安吾の作品[14]のなか、一九三九年に発表された本作が一番詳しく描かれたのである。「たまたま時世が時世であったから」という一文を以てまとめ終わらせようとした語り方になっているにもかかわらず、却ってそうした「時世」を歴然と読者の眼前に迫ってくるとも言える。第一、一九三九年の〈現在〉に「主義者づら」を大きく取り上げること、「主義者づら」の「危険」性強調することが、とうして必要であるかを考えれば、「民衆の自由」、「精神」を圧殺して、「軍部」「統制」の下に置かれる「不自由」な状態が、一九三九年の〈現在〉では、〈主義者〉が特定の「統制」対象

であった「大震災から三年過ぎた年」と比べれば、同じような状態であること、あるいはそれより厳しくなってきたことを、作者が意識しているかもしれない。「支那事変」の激化に伴い、経済の戦時体制化が急務となり、一九三八年四月に「国民総動員法」が提出され、制定される。「一九三九年、一九四〇年当時の「日本の言論・思想・出版界は、きわめて危機的な状況の中に置かれ、国内の言論・思想の統一が一段と強化されていった」[15]。「自己主張しない「滅私奉公」の思想が国政として」まで強調されていた時代[16]である。

「常に考えている」顔付」（「考え深い顔付」）＝「主義者づら」として描出される按吉が「必要以上に考え深い」「怪物」として表現されたことも見逃さなければならない。

> 穏良な坊主の子弟のことだからこの怪物の入学には一方ならず怯えた形で、だから少しぐらい神経衰弱になっても試験のある学校へ行くべきであったと今更嘆いてみたのであったが、栗栖按吉に話しかけられることがあると、気の毒なほどひやりと顔色を変えるのであった。が、幸いにして、読者ももとより御承知の通り、蟇やゴリラはめったに人に話しかけない。

上述した〈主義者〉は「危険」であることについて、引用文にあるように、按吉が「怪物」として表現され、そして「怪物」は恐怖感を覚えらせる存在として語られている。当時は社会主義者の行動が国家に有害のため、震災後の混乱に乗じて生命保護の名義の下、社会主義者への虐殺事件が次々起こされた。日本の民衆の自由、独立を求める精神を圧殺した治安維持法が恐怖の発端を開き、警察力によって大量の社会主義者が殺害された。「社会運動や労働運動に携わる人々に恐怖心を植え付けた」時代[17]である。「勉強記」で「主義者づら」の人を「精神病院へ行く」べきことは、時世へのアイロニー・批判としても捉えるかも知れない。しかしながら「幸いにして、読者ももとより御承知の通り、蟇やゴリラはめったに人に話しかけない」という語り手よりの一文で、筆勢が変わられ、「主義者づら」をしている按吉を他の「危険」な「主義者」から遠く離させるようにする。いわば「主義者づら」や「刑務所」などの時世の敏感な言葉扱いがなされながらも、作中では「主義者づら」は単なる外貌描写にとどまるだけにするように見える。時世への批判を避けて〈笑い〉へ向きを変えていくことも十分に言えるが、ここで重要なのは、むしろ語り手を通して「主義者づら」「刑務所」「保護」などに関わる「読者」の認識の仕組みのありようを浮彫りにすることであろう。作品にある「人々」、すなわち「読者」の認識の仕組みを明らかにするために、フーコーにおける精神異常者への捉え方を参照したい。

フーコーは『狂気の歴史』（新潮社、一九七五・二）の中で古典主義時代に監禁されてしまう「狂気」のありようについてこのように述べている。

> ある一つの感受性が一線を画し、敷居を高くし、選択し、追放する一つの感受性が。（中略）理性は、鎖をとかれて荒れ狂う非理性にうち勝つようにあらかじめ配慮されていて、純粋な状態で勝ちほこったように支配権をふるうのだ。（中略）狂気は閉じ込められてしまい、監禁のとりでのなかで、〈理性〉に、道徳律に、それらの支配する単調な夜に結び付けられてしまったのである。

ここではフーコーは精神異常者が認識され監禁されたことを強調す

るのではなく、「監禁」という行政的手段が「狂気」（者）に対する表象の装置を構築することで、非社会的・非道徳的対象としての新たな狂気の知覚――「監禁」されるもの＝狂気（者）、を可能にしたことを警戒している。そして、「監禁」により認識される「狂気」（者）は「監禁」を可能にする道徳的概念とともに、知覚された時にはすでに倫理的ではない存在となって大衆に認識される。「狂気」を監禁する（べく）という行政的な手段が大衆の狂気への認識（――狂気は危険である、狂気は監禁されるべく）を成り立たせていくことが示唆に富んでいる。

「勉強記」の場合では、「刑務所の鉄格子」という言葉は使用されているが、国や行政などの問罪を強調するということよりも、「だから当今「常に考えている」顔付をあくまで見たいという人」と「たまたま時世が時世であったから、人々は栗栖按吉の考え深い顔付を見る」という二箇所が示しているように、作者（もしくは語り手）は（政府や、メディアなど、伝言諸々な要素からなる）時世に影響されやすい「人々」の、「讀者」の「主義者づら」への認識の仕組みを問題にしていると思われる。

「主義者づら」が「刑務所の鉄格子のあちら側にある顔だと思いこんでしまうのだった。即ち、これが「主義者づら」だと思った」の箇所が示したように、語り手の陳述したいことを押し付けがましい感じまで与える完結形の「のである」で述べている。読者に対して、「主義者づら」は監禁されるべくという認識が一つの確定式で強調されている。語り手（・作者）は、そうした読者の認識の仕掛けを生み出した時世を批判しているが読み取れる。時世への批判というより時世に通用する「主義者づら」（ないし同時代の社会主義者）への論理――「主義者づら」（ないし同時代の社会主義者）＝「刑務所の鉄格子のあちら側」にある顔、「常に考えている」顔付をする人は精神病院にいる――に正当性を欠けていることを作者は問題視していると思える。作者は按吉の「主義者づら」を獅子とか蟇とかの考え深い顔付に等価させることで、時世に通用する観念に包含されない場違い者に転換させることで、「主義者づら」の按吉を、時世に通用する「主義者づら」（ないし同時代の社会主義者）への観念認識の仕組みから脱出させていくという作者の意図があると思える。

V　反（・無）〈目的論的な思考〉という「勉強」の成果

按吉は鞍馬先生の放屁にあてられて、思わぬ厭世感にかりたてられていたらしい。鞍馬先生の伝授がもう一年間もつづいたら按吉は厭世自殺をしなければならないような結果になったかも知れなかった、と語り手が言う。先生が安直な売春婦を相手にして容易く童貞を失って先まったく厭世的になった故郷に帰ったおかげで、按吉は自殺がひとつ助かったという。按吉は先生の相手をつとめた売春婦にお礼を述べたいものだなどと、忘恩的なことを一向に平然として考えているほどであった。

> 世界中の言葉という言葉が総がかりになっても表現しきれない神秘な感覚というものをどうして三十何年も我慢していらっしゃったのか分らないし、その予想が外れたからといってどうして故郷へ帰らなければならないのかてんでわけが分らない。一生だまされていたなどと大変なことを言って嘆いていらっしゃるが、誰がどういう風にしていたのだか一向わけが分らない。先生

がこんな大変なことを言って嘆いているのをきいていると、先生が言葉という言葉をみんな覚えようとしたのは、つまりそれを総がかりにしても表現しきれないようなことを、実はどこかに表現されているのだと感違いしてせっせと勉強していたようにも思われるし、三十何年も童貞を守っていたくせに、実のところは先生年中そのことばかり考え耽けっていたようにも思われるし、これはもうてんでわけが分らないのだ。

鞍馬先生はセックスに「世界中の言葉という言葉が総がかりになっても表現しきれない神秘な感覚」を求めるが、容易く童貞を失ってしまった。按吉が、表現しきれない神秘な感覚が実はどこかに表現されているのだと感違いして、世界中の言葉という言葉をせっせと勉強していた鞍馬先生の行為が理解できなかった。

按吉は鞍馬先生の帰郷を切っ掛けに「若い身そらで、悟りをひらこうなどとは、どう考えても思慮ある人間の思想じゃない」と反省するようになる。仏教の講座に出席して、悟りきった哲理の解説に、「悟りの明るさとか、希望とか、そういうものの爽快さを、どうしても感じることができなかった」と告白する。稀に高僧を訪ね、「各の高僧達は、各の悟りの法悦をきかせてくれた。けれども、ここでも、やっぱり人肉の市をさまようような切なさだけは、教室の中と変りがなかった」と苦悩し続ける。按吉はよく女を論じる高僧に簡単に同感できなく、「悟り」に「高僧の肉体が、肉体の温顔が」付随する「悟り」の「毒気」に打たれ慄然としたりする。ある日、回教徒の志望者を募集するビラを見て、締切の最後の日まで、按吉は真剣に考えてメッカ、メジナへ行きたくなってきたのである。締切の日、彼は思いきって、丸ビルへ出かけて行った。そうして、講習会場の入口まで行って、再び決心がつきかねて、三度もその前を往復した。語り手は講習会場に入らなかった理由を――「彼は丸ビルへくる電車の中で、すぐれて美しい女学生を見たのである。目のさめる美しさだった。彼の心は激しく動いた」と付け加えて語る。それで「アラビヤへ行こうなどとは、大嘘だと思ったのである」と思って、生れてはじめて本当のことをした感動で亢奮していた」と按吉が自分に言い聞かせる。

按吉の勉強の過程を整理すると、「悟りをひらいていない」ために涅槃大学の印度哲学派に入学する→（印度哲学の）原書を読むために梵語やパリ語の講義を受けてその辞書をめくる→「チベット学者になりかねない」ためにチベット語を勉強する→悟りを開らきたいために、仏教講座に出たり、高僧を訪れたりする。いわば按吉の勉強には何らかの意図や目的があったことが確かである。言い換えれば、按吉の勉強過程には一種の目的論的な思考の様式がなされている。目的論的思考の誤謬、欠陥といえるものは、感情の中身、いわゆる信仰に関するものであると言えよう。按吉はまさに悟り一途のため、愚昧な青道心のため、何代目かの管長候補の芸者買を真摯に好意的に捉えていることがこのように表現されている。。

思うに何代目かの管長候補は、二人の青道心が、酔わないうちから女を論じ、酔えば益々女を論じ、徹頭徹尾女を論じて悟らざること夥ただしい浅間しさをあわれみ、惻隠の心を催したのに相違ない。高僧はどのように、又、どの程度に、女色をたのしむべきか、という具体的な教育を行うつもりであったのだ。（中略）／龍海さんも按吉も、何代目かの管長候補の厚意に対して感謝しないわけではなかった。それはたしかに純粋な厚意であったに相違ない。愚昧な二人の青道心を、いくらかでも悟りの方へ近づけ

てやろうという、しかも芸者買という最も誤解され易い手段を用いて敢て後輩を導くという、容易ならぬことである。――けれども釈然とはできなかった。どうしても、なにかしら、割りきれない暗さが残った。

引用文にあるように、按吉は該当していそうな回答――高僧が徹頭徹尾に女を論じられる〈べき〉こと、を得ると幾らか疑念をいただいてもそうした回答を信じるようにする。「釈然とはできなかった。どうしても、なにかしら、割りきれない暗さが残った」が、他の視点から高僧の女性への捉え方を見直す可能性も極めて低いということを示してもいる。按吉がついに「坊主たちは、女を性慾の対象としか考えない」、高僧の女性の中には「激しい対象としての女性」はないと痛感するようになる。しかし「どちらが正しいか、それはすでに問題外だ」の箇所が示したように、按吉は高僧における女性の問題についてコメントを差し控えている一方、高僧に対しては不信感が募ることが読み取れる。その後、按吉が美しい女学生に深い感銘を受けて強く心を動かされ、回教徒になる、なろうとすることをやめた。娘が目の前の、〈今〉、〈ここ〉にあるのに対して、悟り（の目的地・聖地）は沙漠を横断してからの〈遠方〉、〈将来〉にあることが言えよう。

〈今〉、〈ここ〉を言い換えれば〈現実〉、〈あるがままの自然〉――〈無目的論的な思考〉に、〈遠方〉、〈将来〉を言換すると〈理想〉〈加工した一つの概念・観念〉――〈目的論的な思考〉になるだろう。「生れてはじめて本当のことをした感動で亢奮していた」と按吉が告白して、「その日から、彼は悟りをあきらめてしまった」ことは、〈目的論的な思考〉の「悟り」を放棄して、〈現実〉、〈あるがままの自然〉――反（・無）〈目的論的な思考〉に転身した、できたことである。前述した、表現しきれない「神秘な感覚」が実はどこかに表現されているのだと勘違いして、世界中の言葉という言葉をせっせと勉強していた鞍馬先生における「神秘な感覚」とへの執着とその失敗も、逆説的にこうした反〈目的論的な思考〉の主題を仄めかしたのである。そして、反（・無）〈目的論的な思考〉の主題が実はもっと幅広い視点で提示されていたと思える。

Ⅵ 「資本論」、「近代」、「今日」

作品に戻ると、冒頭部はこのように語られている。

大震災から三年過ぎた年の話である。昨今隆盛を極めているアパートメントの走りがそろそろ現れた頃で、又青年子女が「資本論」という魔法使いの本に憑れだした頃でもあった。生活の形式にも内容にも大きな転換期が訪れようとしていた。「近代」が、また「今日」が、始まろうとしていたのである。

「勉強記」は「アパートメント」と「資本論」の流行が「近代」、「今日」の始まりの象徴であることから語り始める。一九二三年九月一日午前一一時五八分、相模湾の北部を震源とする大地震が関東地方を襲った。大震災の復興支援に「災害に強く、効率が高い鉄筋コンクリート造のモダン的な高層集合住宅」[18]が建設されるようになる。アパートという住空間の変容は近代的な産業都市にふさわしく「集合／共同住宅」の場所として構想されながら、人々がやむを得ず、分割・区分される住まい環境に置かれていることになる。モダン都市の記号となるアパートの言及はやや物語の展開から無関係に見えるが、作者

は鍵がかけられている部屋ごとに区分られているアパートの分割機能をもって、「主義者づら」の主人公按吉を「当節の悧巧な人」から一線を画する象徴として考えられる。「勉強記」では、按吉が「近代」、「今日」の反対方向の、〈前近代〉的な仏教的な「悟り」に一途に求めていた人物と造型されている。

一方、『資本論』について、一八九三年の「「国家学会雑誌」（第六巻第七二号及び第七四号）に掲載された草鹿丁卯次郎『カル・マルックシ』が、日本への『資本論』の紹介の嚆矢」である。一九二四年高畠素之訳大鐙閣版「資本論」が全十冊の日本語訳完了し、のちに改訳せられ、新潮社版、改造社版が次々出版された。「戦争前まで広く行われた改造社『資本論』は各冊一円の廉価版として予約募集で売出され、発行部数は一五万部と称せられる」[19]。『資本論』がいよいよ広く世に迎えられたのは大震災前後にあてることが明らかである。この時期の『資本論』についての一般的解説文献を見ると、堺利彦『社会主義学説概要』（一九二五年）、河上肇『マルクス資本論略解』（一九二五年）、『階級闘争の必然性とその必然性的転化』（一九二六年）などが目に入られる。『資本論』にある「剰余価値の生成過程」に関する階級意識とか、第三部「共産主義」の理念が数多くの労働階級、知識階級に受けられると言われている[20]。『資本論』が資本主義的生産様式、剰余価値の生成過程、資本の運動諸法則を明らかにした最高峰の経済学書だけではなく、社会運動を導く（ための）〈指導書〉でもある。「青年子女が「資本論」という魔法使いの本に憑れだした」の箇所が示したように、「勉強記」において『資本論』が青年男女を魅了させる「魔法使いの本」として表現され、時代に対して敏感的で、新しい思想や芸術に鑑賞する（できる）若者の必携の書物とされている。「「近代」が、また「今日」が、始まろうとしていたのである」のところが示したように、日本の西洋化という「近代」、「今日」の道程が述べられている。「青年子女が「資本論」という魔法使いの本に憑れだした」ということは「青年子女」が「近代」・「今日」に入るため、『資本論』なしでは前進できないようにも理解できる。「青年子女」にとって『資本論』が「近代」・「今日」のドグマのような存在のようである。『資本論』にある社会的、政治的、経済的の科学性が認められながら、人間的文学的の領域において、それが一つの規範として、一つの〈目的論的な思考〉として成り立つこと自体に対して批判しなければならないことは、安吾が早い段階ですでに仄めかしたと考えられる。

由来、文化は個人生活の内容（幸福と言ってもいい）の減少を条件として出発し、進化する。かく圧迫を余儀なくせしめられた個人のために、その血と肉の人間悲劇を代弁し、反逆しうるものは文学である。文学は血と肉に彩られた文明批判の書である。科学に、社会に、問題を提出するものである。文学の立場からすれば、科学は文学以前のシステムにすぎない。（坂口安吾「新しき文学」「時事新報」一九三三・五・四～六）

ここでは、『資本論』の名が出ていないが、「科学」の一領域である経済学書の『資本論』も安吾の批判する射程に入っていると思われる。「勉強記」は、冒頭部が「アパートメント」や「資本論」や「近代」や「今日」などのモダン的なイメージを前景化させて、相対的に〈前近代〉的な人物・按吉の勉強（「悟り」）の失敗の描出を通して、反（・無）〈目的論的な思考〉の重要性・必要性を問うという主題を持つ作品と言えよう。

Ⅶ　おわりに

まとめると、「勉強記」では、作中人物、ないし語り手を愚かなものとして設定しているように思えることが、「諷刺」にある、上位にいる笑う対象、と下位にいる笑われる対象、という〈笑い〉の世界のありがちな〈上下関係〉を撹乱・崩壊させる、という安吾の〈笑い〉観にある一貫性を反映している。回教徒の講習会にいく途中、按吉が美しい女学生を見て心動かされ、出席を取りやめる。初めて本当のことをしたと感動して悟りを諦めた。按吉が〈目的論的な思考〉の「悟り」を放棄して、〈現実〉、〈あるがままの自然〉――反（・無）〈目的論的な思考〉に転身した、できたことである。前述した、表現しきれない神秘な感覚が実はどこかに表現されているのだと勘違いして、世界中の言葉という言葉をせっせと勉強していた鞍馬先生の結末も、逆説的にこうした反〈目的論的な思考〉の主題を仄めかしたのである。「勉強記」は、冒頭部が「アパートメント」や「資本論」や「近代」や「今日」などのモダン的なイメージを前景化させながらも、相対的に〈前近代〉的な人物・按吉の勉強（「悟り」）の道程の描出を通して、反（・無）〈目的論的な思考〉の重要性・必要性、言い換えれば、（目的論的な悟道のような）観念、定義化・概念化されがちの日常を問い直すことを主題としている作品といえよう。

注

（1）後編の始まり「その昔、泉州堺の町に、表徳号を社楽斎という俳人があった」から「その日から、彼は悟りをあきらめてしまった。龍海さんは巴里密航の直前に、女に迷って、行方不明になってしまった。そうして、生死が、わからない」結末までの部分が『炉辺夜話集』収録時に加筆された部分に当てる。異同について、表記上では初刊の旧漢字は再収録と全集で新漢字に改め、仮名は古仮名遣に統一している。数か所の誤植だと思われる個所の訂正が見られる。

（2）「『紫大納言』「イノチガケ」の他に、「盗まれた手紙の話」「勉強記」の現代物（？）の二作も読んだが、やはり私の或る好みから言えば、この「盗まれた手紙の話」「勉強記」のように、現代の都市生活での奇想天外の味を湛えた作品も沢山あるが、私自身の印象では、それは概して力が入り過ぎているようで、或る安定感が昔物（？）には及ばないように思う。」井上友一郎「坂口安吾著『炉辺夜話集』」（関井光男編『坂口安吾研究1』冬樹社、一九七二・一二）

「炉辺夜話集」について、井上友一郎の論説以外に、大井広介が「阿呆らしさを阿呆らしさとして、低きを低きとしてつきつめようとする激さに見出される。［中略］この手がかりあつて『紫大納言』のモティーフもより鮮明にならう」と評している（大井広介「私小説の談義――『能得五郎の生活と意見』」「現代文学」、一九四一・一〇）ほかに、伊藤整が「作者の強靭なユーモアが作風の基調にある写実的な暗さと戦ひそれを圧倒しようと、激しくつとめてゐる気配が目立つのである。そのユーモアに息吹きを与へてゐることが、此の作品集の魅力をなしてゐる。」（伊藤整「書評／短篇小説集　豊島、坂口、火野、滝井の作」「東京朝日新聞朝刊三―八」一九四一・八・一八）

（3）「自伝的小説」について、宮本久義（「一〇〇％信じ、一〇〇％疑う」山崎甲一ほか著『無限大な安吾』菁柿社、二〇〇七・八、所収）と吉田公平（「坂口安吾の「私」語りと『荘子』」山崎甲一ほか著『無限大な安吾』前掲）も指摘している。

（4）奥野健男「解説」（『定本坂口安吾全集』第三巻、冬樹社、一九七二・一一）

（5）土屋慶子「『勉強記』――風俗化されない魂について」（森安理文ほか編『坂口安吾研究』南窓社、一九七三・六、所収）三枝康高も「勉強記」を「ファルスは成熟していたもの」と位置付ける。「「勉強記」「風人録」「朴水の婚礼」というプロセスで、彼のファルスは成熟していたもののようである。すなわち「勉強記」はいくぶん真面目な筆致から、ユーモラスな空気を帯びはじめ、「風人録」では登場人物を戯画化にすることに成功し、「朴水の婚礼」では熱気に近いファルスの世界が展開されている」。三枝康高「ファルス論について」（森安理文ほか編『坂口安吾研究』前掲）

（6）「この「勉強記」が「文体編輯の北原武夫から、思いきった戯作を書いてみないかという提案」（「茶番に寄せて」「文体」一九三九・四）に答えた書いたものであり、完全なファルスな形式をとっているにもかかわらず、内容

的にはさきの「風博士」や「霓博士の廃頽」と大きく異なっていることに留意する必要があろう」矢島道弘「坂口安吾・想念の系譜――終戦までの作品を中心に」（久保田芳太郎　矢島道弘編『坂口安吾研究講座1』三弥井書店、一九八四・七）

（7）「「勉強記」からは、「道化」の形象化を試みる安吾の格闘の痕跡もうかがえよう。／明らかに〈笑い〉を狙った本作には、至る所に「茶番に寄せて」と共通する意識が顔を覗かせる」佐藤貴之「笑われ続ける「道化」：坂口安吾「茶番に寄せて」と「勉強記」から」（「昭和文学研究六九」二〇一四・九）

（8）「栗栖青年は、自分の欲望を正視して、それに生きる方が人間らしいと決意し、そうした生き方を選んだのである。／ここで栗栖青年が到達した観念は、のちの「堕落論」や「欲望について」などにもつながってゆく、きわめて常識的、合理的な精神であって、十分にそれらの作品の前駆をなすものとして考えてよいように思う。」土屋慶子「『勉強記』――風俗化されない魂について」（森安理文ほか編『坂口安吾研究』前掲）

（9）「「勉強記」とは、求道のための様々な「勉強」に挫折することによって、按吉が「女のために迷いさうで、義理も命もすてさうな脆さ」――人間としての「本当のこと」を発見するという〈反教養小説〉なのである。／〈後記〉（「後記」『炉辺夜話集』、執筆者注）が記された一九四〇年末は、自己の「文学の」基礎をなす「ふるさと」というキータームを見出し、すでに「文学のふるさと」の構想が萌芽していたことを示す重要な結節点と言える。」石月麻由子「〈反-教養小説（アンチ-ビルドゥングスロマン）〉としての「勉強記」―坂口安吾『炉辺夜話集』論序説―」（「明治学院大学教養教育センター紀要」二〇〇九・三）

（10）佐藤貴之「笑われ続ける「道化」：坂口安吾「茶番に寄せて」と「勉強記」から」（前掲）

（11）高木卓　大井広介　坂口安吾　井上友一郎　平野謙　佐々木基一　宮内寒弥「昭和十六年の文学を語る」座談会（「坂口安吾全集」第一七巻、一九九〇・一二）

（12）「その昔、泉州堺の町に、表徳号を社楽斎という俳人があった」から「その日から、彼は悟りをあきらめてしまった。龍海さんは巴里密航の直前に、女に迷って、行方不明になってしまった。そうして、生死が、わからない」結末までのが『炉辺夜話集』収録時に加筆された部分に当てる。坂口安吾「勉強記」（『炉辺夜話集』スタイル社一九四一・四）

（13）佐藤貴之は「勉強記」を以下のように作品をまとめる。「「勉強記」は、悪戦苦闘の「勉強」を延々記しておきながら、最後に「勉強」の無意味さを勉強した、という洒落落ちの小説である。この落ちは「勉強記」という題名を自我撞着に追い込むことで、「合理的」な成長物語を脱臼すると共に、結末への統一的な解釈を撹乱している」佐藤貴之「笑われ続ける「道化」：坂口安吾「茶番に寄せて」と「勉強記」から」（前掲）

（14）一九三八年に発表した「女占師の前にて」（「文学界」第五巻第一号）に、「中学生のころ」の主人公の「私」とその友人の「沢辺狂人」が「当時社会主義者の群れ」の集合・取り調べ事件を見聞する一節が描かれていた。その次の一九四〇年と一九四二年にそれぞれ発表した「篠笹の陰の顔」（「若草」第一六巻第四号）と「日本文化私観」（「現代文学」第五巻第三号）においても、二三、二四歳、即ち一九二九年、一九三〇年あたりの「左翼運動の旺盛な時代で、しきりに「警官に訊問」される」という話が書かれている。

（15）相馬正一「芸術的抵抗」（『若き日の坂口安吾』洋々社、一九九二・一〇）

（16）吉田公平「坂口安吾の「私」語りと『荘子』」（前掲）

（17）「事実、関東大震災後に検挙された社会主義者は数多くいた。九月二一日の『東京日日新聞』は「地震から主義者の検挙六十余名」と伝えていた。思想家の大杉や山川均は厳重な監視下におかれていた。農民運動家の沼稲次郎や詩人の加藤一夫は検束されている。小説家の小山未明・藤森成吉・前田河広一郎は、流言流布の嫌疑で取り調べを受けた。検挙の理由は「流言流布」の防止だったり、かれらの「生命保護」だったりするが、甘糟大尉事件はその渦中で起きたのである。」和田博文〈朝鮮人殺害事件／甘糟大尉事件／亀戸事件〉『関東大震災とモダン都市』和田博文編『関東大震災』（ゆまに書房、二〇〇七・六）

（18）紅野謙介編『アパート』（ゆまに書房、二〇〇六・九）著者は龍胆寺雄「アパアトの女たちと僕と」（「改造」一九二八・一一）庄野義信「エマ子とその弟」（「婦人サロン」一九三〇・八）武田麟太郎「日本三文オペラ」（中央公論一九三二・六）を取り上げ、「小説に描かれたアパートメントハウスは、その言葉とはうらはらに分割(アパート)されない集合／共同住宅であり、近代家族から逸脱したものたちが身を寄せる場所であり、国家や市民秩序から零れ落ちたものたちが肩を寄せ合う空間として表象されていた」とも指摘している。

（19）高畠素之訳大鐙閣版「資本論」もこの年（一九二〇年、執筆者注）六月初めて第一冊を出し、同二四年に至って全一〇冊の邦訳完了を見た。［中略］その後間もなく同じ高畠の手によって改訳せられ、大正一四年一〇月―一

五年一〇月に今度新潮社から四冊本として出版せられた。この新潮社版『資本論』は多くの読者をもらったようであるが、翌昭和二年一〇月――三年四月には、さらに幾多の改正を加えられた上、出版社も三度び改められて改造社から「定本」として刊行された。これが戦争前まで広く行われた改造社『資本論』で、冊数は五冊となったが、各冊一円の廉価版として予約募集で売出された。その発行部数は一五万部と称せられ、いよいよ広く世に迎えられたようである。鈴木鴻一郎「「資本論」と日本」（弘文堂、一九五九・一）

（20）鈴木鴻一郎「「資本論」と日本」（弘文堂、前掲載）に参考したうえ、発表者がまとめた。

（中国広東海洋大学外国語学院日本語科講師）